



直接交換関係における公正さの規範

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井手, 亘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004772

直接交換関係における公正さの規範

井手 亘

社会交換では対人相互作用をその相互作用への INPUT（貢献）と、その相互作用からの OUTCOME（結果）の関係からとらえる。この社会交換がどのようなルールに従うのか、どのようなルールが公正とされるかについては、Adams (1965) 以来、多くの研究がなされてきた (e. g., Deutsch, 1975 ; Sampson, 1975 ; Leventhal, 1976 ; Walster et al., 1978)。そこから、EQUITY, EQUALITY, NEED といった社会交換を規定するルールが見いだされてきた。Adams (1965) によると、この社会交換は2人の人が直接に INPUT と OUTCOME を交換する「直接交換関係」と、直接には交換関係にない2人またはそれ以上の人が、ある第三者の人と共通して交換関係にあり、その人から報酬の分配などを受ける「共通第三者関係」の2つに分けられる。共通第三者関係は報酬の分配において多く見られる関係なので、ここではこの関係を「分配関係」と呼ぶこととする。ところが、先に述べた諸研究はいずれも分配関係を扱ったものであった。従って、そこで見いだされて来たルールや、そのルールの採用される条件というものは厳密には分配関係に限定され、広く交換関係一般に適用できるとは限らない。そこで、交換関係のもう一つの基本的なモデルである直接交換関係と分配関係を比較して、この分配関係のもつ特徴を検討し、直接交換関係において従来のルール等が成立するのかどうかについて検討する。

まず、直接交換関係と分配関係の違いについて検討したい。交換は、具体的な対人行動、行動の結果についての社会的比較、比較の結果交換関係が望ましくないと判断した場合の改善行動、の3つの対人行動からなっている。直接交

交換関係と分配関係の違いについて、これらの対人行動の相手の点から検討してみる。直接交換関係とは2人の人が互いに INPUT を行い OUTCOME を与えあう1対1の関係であり、3つの対人行動の相手は常に同じ人である。一方、分配関係は、INPUT にあたる行為をする行為者の人々と、分配者という第三者の立場の人で構成される。そして INPUT に対する OUTCOME は、分配者によって決められ、分配者から与えられる。このことから行為者の人々は互いに交換関係にあるのではなく、それぞれが個々に分配者と交換関係にあると考えられる。分配関係は1対1の交換関係が集まってできた多対1の交換関係である。このため3つの対人行動の相手は同じではない。具体的な対人行動と、交換が望ましくない時の改善行動の相手は分配者であり、比較の相手は行為者の人々である。つまり交換関係はそれぞれの行為者と分配者との関係であり、行為者の人同士はそれぞれの交換関係について比較しあう関係にあるだけである。

このような2つの交換関係の差が、どのように交換のルールに影響するのかについて、INPUT の評価、INPUT と OUTCOME の結び付き、OUTCOME の効率の3つの点から検討する。まず、交換関係における INPUT とは、「OUTCOME を与える場合に考慮されたり、費用(コスト)として考慮されるもの。」をさすが、この INPUT の評価について2つの状況を比較してみる。直接交換関係では、互いに相手の INPUT を評価して OUTCOME を与えるから、コストの評価の点で評価の基準が異なり、両者の間で INPUT の評価に差が生じることがある。それに対して分配関係は多対1の交換で、INPUT の評価を行うのは分配者1人である。この分配者は第三者の立場にたっているから、INPUT 評価において、ある行為がグループ全体にどれだけ貢献したかという点から INPUT を評価する。この評価の1つの特徴は、ある行為者がその行為を行うためにどれくらい努力したか、個人の資源をどれだけ使ったか、というその行為者にとってのコストの評価が十分には行えない事である。ある行

為をするにあたって楽々とそれをした人と苦勞してした人との差は考慮されにくいのである。また、分配者による評価のもう一つの特徴はINPUT の評価を行うのが分配者1人であるから評価の基準が1つであり全員に共通したものとなる事である。評価の基準が全員に対して一貫することは手続きの公正さの重要な条件である (Leventhal, 1980)。分配関係は手続きの公正さが成り立ちやすい関係なのである。このように分配関係では手続き的に共通の評価基準が適用され皆が同じ待遇を受けている、という手続きの公正さがあるために分配者による INPUT 評価に対して不満があっても、その INPUT 評価による分配そのものは受け入れられやすいのである。

次に、2つの状況での INPUT と OUTCOME の結び付きについて検討する。2者の直接交換関係での交換は1対1の直接交換であり、互いに INPUT, OUTCOME が交換されている。各々の人は互いに INPUT を行い、OUTCOME を与えあう。両者は INPUT, OUTCOME の両方において結び付いている。また、交換が直接ということは、ある人の INPUT がその相手の人に与えられる OUTCOME に直接結び付くということである。相手の人に多くの OUTCOME を与えるためには多くの INPUT が必要とされるし、相手の人にあまり OUTCOME を与えないときは INPUT は少なくてもよい。同時に、相手の人から多くの OUTCOME を受け取る時は相手の人は多くの INPUT が必要となり、相手の人から受け取る OUTCOME の少ないときは相手の人の INPUT も少なくてもすむ。このように INPUT と OUTCOME が結び付いているため、EQUITY のような複雑な INPUT と OUTCOME の対応づけを実現するのは非常に困難である。

これに対して、分配関係での分配者と行為者の交換関係は、互いに INPUT, OUTCOME を交換するものではない。行為者はその関係において INPUT を行い OUTCOME を受け取るが、分配者は行為者の INPUT を評価して OUTCOME の分配のしかたを決めているだけである。分配者自身にはその交

換関係への INPUT も OUTCOME もない。その意味で分配関係での交換は半分の意味しかもたない特殊なものである。従って、この交換関係では交換によって行為者が損をしたり得をすることはあっても交換の相手の分配者が損をしたり得をするということはない。このように分配関係では行為者の INPUT, OUTCOME しか存在しないから、直接交換の場合のように行為者に対する OUTCOME の与え方を変化させることが、別の行為者の INPUT の変化を必要とするということはない。ある人が OUTCOME をいくら受け取っても比較相手である仲間の行為者の INPUT によってその OUTCOME が生み出されているのではないから比較相手の行為者の INPUT は変化しない。同じく単なる比較相手である仲間の行為者の受け取る OUTCOME がいくら変化してもそれは誰の INPUT の変化も伴わないのである。これは、分配関係では交換はその行為者と分配者の間で行われており、仲間の行為者はたんなる比較相手に過ぎないからである。しかも交換の相手の分配者はその交換関係では INPUT, OUTCOME がないから、行為者の OUTCOME が変化しても関係はない。つまり、分配関係では OUTCOME の変化は他の誰の INPUT の変化をも伴わないものであり、OUTCOME は INPUT から独立しているのである。OUTCOME の分配において INPUT は数値としての意味しがなく単に分配のめやすとなっているだけである。このように OUTCOME が INPUT と切りはなされているため、分配関係では直接交換関係と異なり、INPUT と OUTCOME を切りはなして、一度 INPUT を評価してそれに対して自由に OUTCOME を決めることができる。だから EQUITY などの複雑なルールを実現できるのである。

第三に、直接交換関係ではある人の INPUT と相手の人の OUTCOME が結び付いているために、同じ INPUT をした時、それによって生み出せる相手の人への OUTCOME は人により異なってくる。ある INPUT をした時、それによって相手の人への OUTCOME をどれだけ生み出せるかをここでは

「効率」と呼ぶことにする。人によっては少ない INPUT で多くの OUTCOME を生み出す効率の大きい人もあれば、多くの INPUT をしても少ししか OUTCOME を生み出せない効率の小さい人もいる。効率の小さい人との交換関係では、相手の人と同じ INPUT をすると受け取る OUTCOME は自分自身の方が少なくなる。逆に効率の大きい人との交換関係では、同じ INPUT をすると受け取る OUTCOME は自分自身の方が多くなる。これは、交換のルールの問題ではなく個人の効率の差の問題である。直接交換では INPUT と OUTCOME の結び付きが強いためこの効率の差の問題が重要となる。

一方、直接交換関係で問題となる効率は分配関係では問題とならない。分配関係の交換の相手は INPUT, OUTCOME のない分配者であるから行為者の効率によって分配者の OUTCOME が変化することはない。また、分配関係の INPUT は、ある行為がグループ全体にどれだけ貢献したかという結果の点から評価され、その行為をするにあたって必要としたコストは評価されにくい。従って効率の大きい人、小さい人の差は、同じコストをかけた時に評価される INPUT が多いか少ないかの差に置き換えられてしまうのである。

以上のような分配関係と直接交換関係の特徴から、分配関係で EQUITY のような INPUT と OUTCOME の関係を織り込んだ数学的なルールが成立する理由と、直接交換関係でもそのようなルールが成立するかどうかについてまとめてみたい。分配関係は多対1の交換関係であり INPUT の評価が分配者1人によって行われる結果、INPUT は共通の基準で評価される。このことは分配において単一のルールが適用されやすいことを示している。さらにこれが一貫性という手続きの公正さをもたらすため、たとえ INPUT の評価において行為者と分配者が対立していても分配結果は受け入れられやすくなる。また、分配関係では OUTCOME が INPUT から独立しているため、INPUT を変えることなく OUTCOME を任意の値に変化させてルールを選ぶことができる。これらのことから分配関係では EQUITY のような複雑な INPUT と OUT-

COME の対応づけが実現できるのである。

これに対して直接交換関係は1対1の交換関係であり INPUT の評価に共通の基準はなく、交換関係にある両者の間で異なってくる。また OUTCOME は相手の人の INPUT と結びついているため、OUTCOME を変えることは相手の人の INPUT も変えることになる。分配関係のように INPUT だけを評価してそれに応じて OUTCOME を調整することはできない。従って EQUITY のような複雑な INPUT と OUTCOME の対応づけはまず不可能で、直接交換関係を規定する公正なルールは INPUT, OUTCOME のどちらかを中心としたルールでなければ現実的ではない。

また、直接交換関係では効率の問題が重要である。効率の差のある者同士の交換では損をするものと得をするものが生まれやすい。この損得は INPUT と OUTCOME の関係から判断されるものであり直接交換では避け難いものである。従って、ルールの選択において INPUT と OUTCOME の両方を考慮すると直接交換では公正なルールそのものが非常に作りにくい。どちらか片方を中心としたルールでなければ効率の問題をもつ直接交換関係ではルールとすることはできない。

では、直接交換関係ではどのような交換のルールが用いられ、どのようなルールが公正とされるのか。INPUT に対して OUTCOME が独立していないことや効率の問題から、分配関係で公正なルールとされる EQUITY は直接交換関係ではルールとして用いるには困難がある。ルールとなると考えられるのは互いの INPUT が等しければ公正な交換とする等 INPUT ルールと、互いの OUTCOME が等しければ公正な交換とする等 OUTCOME ルールの2つのルールである。等 OUTCOME ルールは EQUALITY のルールのことである。この両者を比較するとルールを実現するためのコストの点では等 OUTCOME ルールの方が優っている。等 INPUT ルールでは互いの INPUT を等しくするために互いに相手の INPUT を知る必要がある。しかし普通の交換関係

では、互いの INPUT はその人自身にしかわからないものであり、等 INPUT のルールを実現するためには INPUT を推定しなければならない。それに対して等 OUTCOME ルールでは互いの OUTCOME を等しくする必要があるが、OUTCOME は容易に外から評定できるのでこのルールは実現しやすい。従って直接交換関係では、この3つのルールの中で等 OUTCOME ルールが採用されると予測される。また、これらの交換のルールにおいては、そのルールを選んだ時にその人が損をするか得をするかという事が最も重要な要因である。単純に自己の利益をはかるとすれば、状況によって望ましいとされるルールが異なることは、分配関係においても確認されてきたことである (Shapiro, 1975 ; Reis & Gruzen, 1976)。直接交換関係では、ある一定の OUTCOME を生み出すのにどれぐらいのコストがかかるか、という効率の問題がこれと密接に関わっている。自分の効率が相手よりも大きい場合、最も自分にとって有利なのは等 OUTCOME のルールを採用することである。その場合、同じ OUTCOME を得ても相手に比べて自分はより少ない INPUT をするだけである。逆に自分の効率が相手よりも小さい場合は、等 INPUT のルールを採用した方が自分にとっては有利である。同じ INPUT をしても自分の方が多くの OUTCOME を得られるからである。従って、効率とルールの選び方については、自分の効率の小さい時は等 INPUT のルール、自分の効率の大きい時は等 OUTCOME のルールが望ましいとされ、また実際に選ばれると考えられる。

そこで、直接交換関係においてどのようなルールが採用され、どのようなルールが公正なルールとされるのか、特に OUTCOME を生み出す効率が自分の方が大きい場合と小さい場合とではルールがどのように異なるのかについて実験を行った。実験では、操作によって直接交換関係が EQUITY, 等 INPUT, 等 OUTCOME の各ルールに従うことになる条件をそれぞれ作り、それらと効率の大小とを組み合わせて3×2の6条件を作った。そして、各ルールがどのように評価されるか、その後さらに交換を行う場合にどのようなルール

を希望するかについて実験を行った。

方 法

被 験 者

大阪府立大学の学生74名。そのうち2名は実験の操作に疑いを持ったので結果の分析からは除外した。従って分析に用いた被験者は男50名、女22名の計72名で各条件に12名ずつが割り当てられた。

手続きの概略

被験者を小部屋に入れて、隣の小部屋のもう1人の被験者と2人で実験すると教示した。しかし実際には隣に被験者はいなかった。被験者にある課題を30試行行なってもらうと教示し、1人につき資源30ポイントと得点100点を与えた。練習を2試行させて、課題をするにつれて資源は消費され得点は増えていくことを確認させた。特に、30試行を行うには資源30ポイントは不足であることに気付かせた。

また、2人の被験者が不足する資源を補うため互いに資源を増やしあう方法を教示した。それは、自分の得点を相手に贈るとそれが資源に変えられて相手に贈られるというものである。つまり、互いに自分の得点を減らすことで相手の資源を増やすことができるのである。ここではこれを「贈与」と呼ぶ。この贈与は、自分の得点を1減らすと相手に資源が1贈られるという単純な形ではなかった。自分の得点がどのような割合で相手の資源に変換されるかを「変換の効率」または「効率」と呼ぶこととする。

この変換の効率によって2つの条件が作られた。変換の効率が被験者の方が相手よりも小さい条件、「効率小」条件では、被験者が得点を4減らすと隣にいることになっている相手の人に資源が3の割合で贈られた。相手からは、相手が得点を3減らすと被験者に資源が4の割合で贈られた。つまりこの条件は、相手の方が少ない得点で多くの資源を贈ることができる条件である。変換の効

率が被験者の方が大きい条件、「効率大」条件では、効率小条件の逆で、被験者が得点を3減らすと相手に資源が4の割合で贈られた。相手からは、相手が得点を4減らすと被験者に資源が3の割合で贈られた。つまりこの条件は、被験者の方が少ない得点で多くの資源を贈ることができる条件である。

両方の条件とも次に贈与試行を行ない、被験者と相手との間で互いにそれぞれの得点を減らして資源を贈り合わせた。この資源の贈与を実験者が操作して贈与の結果の状態を3条件作った。なお、ここでは贈与を相互作用として考えるため贈与で使われる得点を INPUT、贈与されることで得られる資源を OUTCOME と呼ぶことにする。

EQUITY 条件では贈与の結果、2人の資源 (OUTCOME)/得点 (INPUT) の比 (O/I 比) が等しくなるように操作された。等 INPUT 条件では贈与の結果、資源 (OUTCOME) に大小はあっても得点 (INPUT) が等しくなるように操作された。等 OUTCOME 条件では贈与の結果、得点 (INPUT) に大小はあっても資源 (OUTCOME) が等しくなるように操作された。結局、変換の効率の2条件、贈与の結果の3条件を組み合わせると計6条件が操作された。贈与の終わったあと各条件とも今の贈与についての評定、将来の贈与の希望量などを尋ね実験を終わった。従って実際には30試行の課題は行なわなかった。

手 続 き

被験者を実験室の2つの小部屋の1つに入れた。この小部屋にはコンピュータ (NEC PC-9801 F) のキーボードとディスプレイ (SANYO CMT-141 H) が置かれてあった。キーボードは、テンキーの0から9のキーが青いテープで囲まれてあった。また TAB キーには赤いテープが貼ってあり、スペースキーには黄色のテープが貼ってあった。ディスプレイの画面は実験の進行と共に実験条件にあわせて自動的に変化するようにプログラムしてあった。また隣の小部屋にはもう1人の被験者が入っていると教示したが、実際には誰もいなかった。

実験の説明及び教示はすべて録音テープを聞かせることで行なった。まず、実験は2人の人が相互に依存しながら正しいものを推論していく過程をみるものであると説明し被験者を「Aさん」、隣の架空の被験者を「Bさん」と呼ぶこととした。またお互いに話をするのを禁じた。次に実験の課題を以下のよう

に説明した。

「この実験ではいくつかの課題をしてもらいます。課題は皆さんの前にあるキーボードの右側の青いテープで囲まれた0から9までのキーが、それぞれどのような記号に対応しているのかを探していくもので全部30試行あります。」

この時、ディスプレイには資源30ポイントと得点100点が表示されていた。この資源と得点について以下のように説明した。

「前にあるテレビの画面をみて下さい。皆さんには最初、得点が100点与えられています。課題がうまくいけばこの得点が増えていくようになっています。また資源が30ポイント与えられています。この資源は課題を1試行するごとに最低1ポイント以上、消費されていきます。つまり、課題を進めていくにつれて資源はどんどん減っていきます。もし課題の途中で資源がなくなってしまうと、その時点で課題は中断され、また得点も半分になってしまいます。しかし、はじめの資源は30ポイントしかないのでこのまま30試行ある課題をすべて行うことはまず不可能です。」

次に不足する資源について互いに資源を増やしあうことのできる贈与試行の説明をした。

「そこで、資源がなくならないように、皆さんがお互いに資源を増やしあう贈与試行が用意されています。贈与試行とは、お互いに相手の人に資源を贈る試行です。ただし相手に資源を贈ると、その贈った量に応じて自分の得点が減少します。つまり、あなたの得点が減らされ、その減った得点が資源に変えられて相手の人に贈られるのです。資源を増やす方法はこのお互いの贈与以外にはありません。自分で自分の資源を増やすことはできませんから資源はお互

いに相手の人次第ということになります。この贈与試行をうまく利用してお互いに資源不足で課題を中断することのないようにしてください。」

また試行終了後の相互作用について次のように教示した。

「30試行が全部終了したあと、Aさん、Bさんの2人でどのキーをどう押せば高い得点が得られ、資源の減少も少なくてすむかについて話し合いをしましょうことになっています。」

このあと画面は練習試行の画面に変わり練習試行の説明を行った。

「練習の第1試行を行ないます。キーボードの右側をみて下さい。青いテープで囲まれた0から9までのキーが並んでいます。このキーを押すと画面の下の白い枠の中に、○、△、×、のいずれかのマークが書かれていきます。皆さんにしてもらうことは、0から9のキーを押して下の枠の中を埋めていくことですが、その時どのキーが○印に対応しているのか、どのようにすれば○印がでてくるのかを調べながら、枠の中を埋めていってください。時間は2分間です。」

このあと練習の第1試行を行ない、続いて第2試行の説明をした。

「練習の第2試行を行ないます。こんども同じように0から9のキーを押して下の枠の中に埋めていく課題です。ただし今回は○印ではなく×印について、どのキーが×印に対応しているのか、どのようにすれば×印がでてくるのかを調べながら枠の中を埋めていってください。時間は2分間です。」

このあと練習の第2試行を行ない画面に練習試行の結果を表示した。練習試行の結果はどの被験者に対しても、被験者（Aさん）の資源が27.8ポイント、得点が107.4点、相手（Bさん）の資源が28.1ポイント、得点が108.3点となったと知らせた。この後、練習試行の結果は本試行では考慮されないことを説明し、それぞれの資源と得点をもとの30ポイント、100点に戻した。

次に画面は贈与試行の画面に変わり、贈与試行の説明を行った。

「まず、AさんからBさんに資源を贈ってください。Bさんはしばらくお待ち

ちください。Aさんの画面に示されているように、Aさんが黄色いキーを押し続けると、そのぶんだけBさんに資源が贈られます。そして、それに応じてAさんの得点が減ります。これは最初の贈与ですから、どれくらいキーをすと押どれくらい資源が贈られ、また得点が減るかということは、わざとわからないようにしてあります。」

被験者が黄色のキーを押して贈与をすると、その結果が画面に表示された。それに対して相手（Bさん）からも贈与が行なわれ、その結果も画面に表示された。この贈与の時、相手（Bさん）は自分の得点をどれだけ減らすと被験者（Aさん）にどれだけ資源が贈られるか、という変換の効率は知っているものとした。これにより、どれくらい贈与されるのかわからなかった被験者（Aさん）とは異なり、相手（Bさん）は被験者（Aさん）に対しどれくらいの量の贈与をするかを自分で決められることを示した。

贈与の条件の操作

この相互の贈与において、得点がどのような変換率で相手の資源となって贈られたのかという「変換の効率」について効率小条件と効率大条件の2条件が操作された。また、贈与の結果それぞれの資源と得点がどのように変わったかという「贈与の結果」について EQUITY 条件、等 INPUT 条件、等 OUT-COME 条件の3条件が操作された。これらを組み合わせて6つの条件が作られた。これについては表1に、被験者（Aさん）、相手（Bさん）の操作された資源、得点、O/I 比の値を示した。

効率小条件で EQUITY 条件では、被験者が相手へ贈るために使った得点は16点、相手に贈られた資源は12ポイント、相手が被験者へ贈るために使った得点は12点、被験者に贈られた資源は16ポイントと操作された。これにより被験者のもらった資源と使った得点の比は16/16、相手のもらった資源と使った得点の比は12/12で、どちらも比率としては1/1と等しくなり贈与の結果は EQUITY のルールに従っている。

表1 各実験条件で被験者と相手が交換する資源 (OUTCOME) 得点 (INPUT) と O/I 比の値

	EQUITY		等 INPUT		等 OUTCOME	
	被験者	相手	被験者	相手	被験者	相手
効率小						
資源 (OUTCOME)	16	12	16	9	12	12
得点 (INPUT)	16	12	12	12	16	9
O/I 比	1.0	1.0	1.33	0.75	0.75	1.33
効率大						
資源 (OUTCOME)	12	16	9	16	12	12
得点 (INPUT)	12	16	12	12	9	16
O/I 比	1.0	1.0	0.75	1.33	1.33	0.75

(注) 資源の単位はポイント, 得点の単位は点, O/I 比は資源/得点の比。

効率小条件で等 INPUT 条件では, 被験者が相手へ贈るために使った得点は12点, 相手に贈られた資源は9ポイント, 相手が被験者へ贈るために使った得点は12点, 被験者に贈られた資源は16ポイントと操作された。従って, 被験者の使った得点と相手の使った得点はどちらも12点と等しくなっている。

効率小条件で等 OUTCOME 条件では, 被験者が相手へ贈るために使った得点は16点, 相手に贈られた資源は12ポイント, 相手が被験者へ贈るために使った得点は9点, 被験者に贈られた資源は12ポイントと操作された。従って, 被験者のもらった資源と相手のもらった資源はどちらも12ポイントと等しくなっている。

効率大条件で EQUITY 条件では, 被験者が相手へ贈るために使った得点は12点, 相手に贈られた資源は16ポイント, 相手が被験者へ贈るために使った得点は16点, 被験者に贈られた資源は12ポイントと操作された。これにより被験者のもらった資源と使った得点の比は12/12, 相手のもらった資源と使った得点の比は16/16で, どちらも比率としては1/1と等しくなり贈与の結果は EQUITY のルールに従っている。

効率大条件で等 INPUT 条件では、被験者が相手へ贈るために使った得点は12点、相手に贈られた資源は16ポイント、相手が被験者へ贈るために使った得点は12点、被験者に贈られた資源は9ポイントと操作された。従って、被験者の使った得点と相手の使った得点はどちらも12点と等しくなっている。

効率大条件で等 OUTCOME 条件では、被験者が相手へ贈るために使った得点は9点、相手に贈られた資源は12ポイント、相手が被験者へ贈るために使った得点は16点、被験者に贈られた資源は12ポイントと操作された。従って、被験者のもらった資源と相手のもらった資源はどちらも12ポイントと等しくなっている。

以上の6条件ごとに画面の贈与の結果の表示は変えられた。画面に表示されたのは被験者が相手から贈られた資源の量、相手が被験者から贈られた資源の量、被験者が相手への贈与のために使った得点、相手が被験者への贈与のために使った得点、被験者と相手それぞれの贈与における得点から資源への変換の効率、贈与の後の被験者と相手それぞれの資源の量と得点、の各項目である。

さらに、ここに表示された変換の効率はこの実験中是不変なので、次に贈与をするときもこの変換の効率が使われることを教示した。また、ある得点はその変換の効率によってどれだけの資源となるかについて、得点別に表にしたものを渡して計算の助けとした。

従属変数と操作のチェック

贈与の結果を表示したあと質問紙により以下の質問を行なった。まず、被験者自身がAさんであったのかBさんであったのかを尋ねた。さらに、被験者が相手に資源を贈るために使った得点、被験者が相手からもらった資源、相手が被験者に資源を贈るために使った得点、相手が被験者からもらった資源、被験者の得点が相手の資源に変わるときの変換の効率、相手の得点が被験者の資源に変わるときの変換の効率の各項目を尋ねた。これらは全て、操作のチェックのための項目である。

次に、贈与の結果について以下の各項目を7ポイント尺度で答えさせた。相手からの贈与についての満足さ。お互いの贈与の結果の公正さ。お互いの贈与の結果、被験者が得をしたか相手が得をしたか。お互いの贈与の結果、被験者が損をしたか相手が損をしたか。相手とのこれからの相互作用については、資源を増やすためにもっとお互いに贈与し合いたいか、贈与し合いたくないか。将来の贈与については具体的に、もう一度相手の人が資源を贈与してくれるとしたら何ポイント贈与して欲しいか、もう一度相手の人に資源を贈与するとしたら何ポイント贈与したいか、を尋ねた。

また相手の印象について次の12項目の7ポイントのSD尺度で尋ねた。良い—悪い、暖かい—冷たい、好ましい—好ましくない、積極的な—消極的な、知的な—知的でない、利己的な—利他的な、社交的な—非社交的な、明るい—暗い、親切的な—不親切的な、協力的な—非協力的な、能動的な—受動的な、感じやすい—にぶい。

最後に実験の本当の目的を述べ、本試行は行なわれないこと、隣には実際には被験者はいなかったこと、贈与の値が全て操作されていたことなどについて説明し、操作に気づいていたかどうかなどの感想を尋ね、謝礼を渡して実験を終了した。

結 果

操作のチェック

まず、各条件の操作が被験者に理解されていたかどうかについては、次の各質問項目で確認した。被験者がAさんであったのかBさんであったのか、については、全ての被験者がAさんと答えた。また、被験者が相手に資源を贈るために使った得点、被験者が相手からもらった資源、相手が被験者に資源を贈るために使った得点、相手が被験者からもらった資源、被験者の得点が相手の資源に変わるときの変換の効率、相手の得点が被験者の資源に変わるときの変換の効率、の各項目については全ての被験者が各々の実験条件の操作どうりの値

を答えた。従って資源、得点の操作は被験者に理解されていたといえる。

次に、被験者が贈与試行で黄色のキーを押していた時間について、効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、どの主効果も交互作用も有意ではなかった。よって、各条件間で被験者からの実際の贈与の量は差がなかった。

贈与の結果について

「相手からの贈与についての満足さ」の結果は表2に示した通りである。これについて効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、効率の主効果 ($F(1, 66) = 7.20, p < .01$) と交互作用 ($F(2, 66) = 21.61, p < .01$) が有意であった。交互作用が有意であったので下位検定を行なったところ効率小条件では、EQUITY条件 ($F(1, 66) = 11.33, p < .01$)、等INPUT条件 ($F(1, 66) = 26.30, p < .01$)の方が等OUTCOME条件よりも満足は高かった。効率大条件では、EQUITY条件 ($F(1, 66) = 9.27, p < .01$)、等OUTCOME条件 ($F(1, 66) = 17.36, p < .01$)のほうが等INPUT条件よりも満足は高かった。

「お互いの贈与の結果の公正さ」について効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、どの主効果、交互作用も有意ではなかった。従って各条件において公正さに差はなかった。

「お互いの贈与の結果、被験者が得をしたか相手が得をしたか」について効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、交互作用 ($F(2, 66) = 56.69, p < .01$) が有意であった。交互作用が有意であったので下位検定を

表2 相手からの贈与についての満足さの平均値

	EQUITY	等 INPUT	等 OUTCOME
効率 小	5.67	6.58	3.92
効率 大	4.92	3.33	5.50

(注) 1 = 非常に不満, 7 = 非常に満足。

行なったところ効率小条件では、等 INPUT 条件のほうが EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 21.46, p < .01$), 等 OUTCOME 条件 ($F(1, 66) = 39.70, p < .01$) よりも被験者が得をしたと評定した。効率大条件では、等 OUTCOME 条件の方が EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 6.73, p < .05$), 等 INPUT 条件 ($F(1, 66) = 69.54, p < .01$) よりも被験者が得をしたと評定し、また EQUITY 条件の方が等 INPUT 条件よりも被験者が得をした ($F(1, 66) = 33.00, p < .01$) と評定した。

「お互いの贈与の結果、被験者が損をしたか相手が損をしたか」について効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、交互作用 ($F(2, 66) = 53.36, p < .01$) が有意であった。交互作用が有意であったので下位検定を行なったところ、ちょうど上記の得をしたかどうかの質問の逆の傾向がみられ、効率小条件では、等 OUTCOME の条件の方が EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 4.23, p < .05$), 等 INPUT 条件 ($F(1, 66) = 35.80, p < .01$) よりも被験者が損をしたと評定し、また EQUITY 条件の方が等 INPUT 条件よりも被験者が損をした ($F(1, 66) = 15.42, p < 0.1$) と評定した。効率大条件では、等 INPUT 条件のほうが EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 29.40, p < .01$), 等 OUTCOME 条件 ($F(1, 66) = 70.79, p < .01$) よりも被験者が損をしたと評定し、また EQUITY 条件の方が等 OUTCOME 条件よりも被験者が損をしたと評定した ($F(1, 66) = 8.95, p < .01$)。

相手の印象

相手の印象についての12項目の SD 尺度をそれぞれ効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、以下の各項目において交互作用が有意であった。良い—悪い ($F(2, 66) = 3.51, p < .05$), 暖かい—冷たい ($F(2, 66) = 3.47, p < 0.5$), 利己的な—利他的な ($F(2, 66) = 6.85, p < .01$)。そのほかの主効果、交互作用はどの SD 尺度においても有意ではなかった。また、交互作用が有意であった各項目について下位検定を行なったところ、良い—悪

い、の項目の効率小条件で等 INPUT 条件の方が等 OUTCOME 条件よりも相手を良いと評定した ($F(1, 66) = 6.43, p < .05$)。また、利己的な一利他的な、の項目で、効率小条件では等 INPUT 条件の方が等 OUTCOME 条件よりも相手を利他的と評定し ($F(1, 66) = 7.25, p < .01$)、効率大条件では等 OUTCOME 条件の方が等 INPUT 条件よりも相手を利他的と評定した ($F(1, 5.99) = 6., p < .05$)。

2 度目の贈与について

「資源を増やすためにもっとお互いに贈与し合いたいか、贈与し合いたくないか」について効率と贈与の結果の2要因の分散分析を行なった結果、交互作用 ($F(2, 66) = 3.39, p < .05$) が有意であった。交互作用が有意であったので下位検定を行なったところ効率小条件で EQUITY 条件の方が等 INPUT 条件よりも贈与したいと答えた ($F(1, 66) = 6.50, p < .05$)。しかしその他の条件間には有意差はなく、各条件の平均値はいずれも7ポイント尺度の4以上(7=非常に贈与したい)であったから、各条件ともさらに贈与し合うことを希望していたといえる。

「もう一度、相手の人が資源を贈与してくれるとしたら、何ポイント贈与して欲しいか」、「もう一度相手の人に資源を贈与するとしたら、何ポイント贈与したいか」の質問から得られた贈与の希望の値をもとにして、もし被験者の希望どおり2度目の贈与が行なわれたら、2人が贈与のために使う得点と受け取る資源はどのような値になるかを各被験者ごとに計算した。その計算方法は以下のとおりである。まず、被験者が2度目の贈与で受け取る資源 (OUTCOME) は、被験者が相手から贈与して欲しいと希望した資源とした。被験者が2度目の贈与で使う得点 (INPUT) は、被験者の変換の効率を用いて、相手へ贈与したいとする資源の量からそれだけの資源を贈るのに必要な得点を逆算して求めた。また、相手が2度目の贈与で受け取る資源 (OUTCOME) は、被験者が相手へ贈与したいとする資源とした。相手が2度目の贈与で使う得点

表3 2度目の贈与で希望する資源 (OUTCOME) の平均値

			EQUITY	等 INPUT	等 OUTCOME
効 率 小					
被 験 者			5.25	11.67	11.71
相 手			6.17	11.58	8.89
効 率 大					
被 験 者			10.58	8.25	8.08
相 手			8.58	5.67	8.58

(注) 資源の単位はポイント。

表4 2度目の贈与で使用する得点 (INPUT) の平均値

			EQUITY	等 INPUT	等 OUTCOME
効 率 小					
被 験 者			8.22	15.44	11.85
相 手			3.94	8.75	8.78
効 率 大					
被 験 者			6.44	4.25	6.44
相 手			14.11	11.00	10.78

(注) 得点の単位は点。

(INPUT) は、相手の変換の効率を用いて、被験者が相手から贈与してほしいとする資源の量からそれだけの資源を被験者に贈るのに必要な得点を逆算して求めた。このようにして求めた被験者と相手の資源 (OUTCOME)、得点 (INPUT) の条件別の平均値を表3、表4に示した。

これらの値から、2度目の贈与で受け取る資源 (OUTCOME) と使う得点 (INPUT) について、効率と贈与の結果と、その資源や得点が被験者の分か相手の分かの要因 (被験者内要因) を加えた3要因の分散分析を行なった。その結果、2度目の贈与で受け取る資源 (OUTCOME) は、効率と贈与の結果の交互作用 ($F(2, 66) = 3.28, p < .05$) と、3要因の交互作用 ($F(2, 66) = 3.75, p < .05$) が有意であった。3要因の交互作用についての下位検定では、効率小条件で等 OUTCOME 条件の時、被験者の方が相手よりも受け取る資

表5 2度目の贈与の資源 (OUTCOME)/得点 (INPUT) の比の平均値

	EQUITY	等 INPUT	等 OUTCOME
効 率 小			
被 験 者	0.28	1.18	0.71
相 手	1.01	1.49	0.91
効 率 大			
被 験 者	1.33	1.56	1.39
相 手	0.55	0.34	0.55

源 (OUTCOME) が多く ($F(1, 66) = 19.64, p < .01$), 効率大条件で EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 9.88, p < .0.1$), 等 INPUT 条件 ($F(1, 66) = 16.48, p < .01$) のいずれも被験者の方が相手より受け取る資源 (OUTCOME) が多かった。その他の条件では, 被験者と相手の受け取る資源 (OUTCOME) には差はなかった。

2度目の贈与で使う得点 (INPUT) は, 効率と被験者か相手かの交互作用 ($F(1, 66) = 61.46, p < .01$) のみが有意であった。この交互作用についての下位検定では, 効率小条件では被験者の方が相手よりも使う得点 (INPUT) が多く ($F(1, 66) = 22.54, p < .01$), 効率大条件では逆に相手の方が被験者よりも使う得点 (INPUT) が多かった ($F(1, 66) = 40.20, p < 0.1$)。ここから少なくとも被験者と相手の使う得点 (INPUT) の量には差があったといえる。

被験者と相手の受け取る資源 (OUTCOME) と使う得点 (INPUT) の値をもとにして, 2度目の贈与が行なわれた場合, その贈与での被験者と相手, それぞれの資源 (OUTCOME)/得点 (INPUT) の比 (O/I 比) がどのような値となるかを計算した。こうして求めた被験者と相手の資源 (OUTCOME)/得点 (INPUT) の比の条件別の平均値を表5に示した。この比について, 効率と贈与の結果と, その比が被験者の比か相手の比かの要因 (被験者内要因) を加えた3要因の分散分析を行なった。その結果, 効率と被験者か相手かの交互作用 ($F(1, 66) = 18.34, p < .01$) のみが有意であった。この交互作用につい

ての下位検定では、効率小条件では有意差はないが相手の方が被験者よりも O/I 比が高く ($F(1, 66) = 3.37, p < .10$), 効率大条件では逆に被験者の方が相手よりも O/I 比が高かった ($F(1, 66) = 17.82, p < .01$)。ここから、少なくとも被験者と相手の O/I 比には差があったといえる。

贈与の総合的な結果

もし2度目の贈与が行なわれたら、2人がはじめの贈与から通算して贈与によって受け取る総資源(総 OUTCOME)と贈与のために使う総得点(総 INPUT)はどのような値になるかを各被験者とその相手ごとに計算した。その計算は以下のとおりである。被験者の受け取る総資源(総 OUTCOME)は、現在、被験者が受け取っている資源に被験者が2度目の贈与で相手から贈与してほしい資源の量を加えたものとした。被験者の使う総得点(総 INPUT)は、現在、被験者の使った得点に被験者が2度目の贈与で使う得点を加えたものとした。相手の受け取る総資源(総 OUTCOME)は、現在、相手が受け取っている資源に被験者が2度目の贈与で相手へ贈与したいとする資源の量を加えたものとした。相手の使う総得点(総 INPUT)は、現在、相手の使った得点に相手が2度目の贈与で使う得点を加えたものとした。

以上のようにして求めた4つの値から、受け取る総資源(総 OUTCOME)と使う総得点(総 INPUT)について、効率と贈与の結果とその資源や得点が被験者の分か相手の分かの要因(被験者内要因)を加えた3要因の分散分析を行なった。その結果、総資源(総 OUTCOME)は、効率と被験者か相手かの交互作用 ($F(1, 66) = 40.76, p < .01$)と、3要因の交互作用 ($F(2, 66) = 5.72, p < .01$)が有意であった。3要因の交互作用についての下位検定では、効率小条件では EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 23.48, p < .01$), 等 INPUT 条件 ($F(1, 66) = 123.89, p < .01$), 等 OUTCOME 条件 ($F(1, 66) = 19.64, p < .01$)のいずれも被験者の方が相手より総資源(総 OUTCOME)が多く、効率大条件では、EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 9.87, p < .01$), 等

INPUT 条件 ($F(1, 66) = 48.17, p < .01$) で相手の方が被験者より総資源 (総 OUTCOME) が多かった。従って両者の間で交換された総資源 (総 OUTCOME) に差の見られなかったのは効率大条件の等 OUTCOME 条件のみであった。

総得点 (総 INPUT) は、効率と被験者か相手かの交互作用 ($F(1, 66) = 171.5, p < .01$) のみが有意であった。この相互作用についての下位検定では、効率小条件では被験者の方が相手よりも使う総得点 (総 INPUT) が多く ($F(1, 66) = 71.64, P < .01$)、効率大条件では逆に相手の方が被験者よりも使う総得点 (総 INPUT) が多かった ($F(1, 66) = 101.14, P < .01$)。ここから、少なくとも被験者と相手の使う総得点 (総 INPUT) の量には差があったといえる。

2度目の贈与が行なわれた場合、2人がはじめの贈与から通算して贈与によって受け取る総資源 (総 OUTCOME) と贈与のために使う総得点 (総 INPUT) の値から、被験者と相手、それぞれの総資源 (総 OUTCOME)/総得点 (総 INPUT) の比 (総 O/I 比) を計算した。この比について、効率と贈与の結果と被験者の比か相手の比か (被験者内要因) の3要因の分散分析を行なった。その結果、変換の効率と被験者か相手かの交互作用 ($F(1, 66) = 16.93, p < .01$) と3要因の交互作用 ($F(2, 66) = 5.07, p < .01$) が有意であった。3要因の交互作用について下位検定を行なったところ、効率小条件では、EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 10.31, p < .01$) と等 OUTCOME 条件 ($F(1, 66) = 16.22, p < .01$) で、相手の総 O/I 比が被験者の総 O/I 比よりも高かった。効率大条件では EQUITY 条件 ($F(1, 66) = 31.03, p < .01$) と等 OUTCOME 条件 ($F(1, 66) = 60.38, p < .01$) で、被験者の総 O/I 比が相手の総 O/I 比よりも高かった。従って、効率小条件、効率大条件のいずれも等 INPUT 条件では、総 O/I 比に差は見られなかった。

考 察

この実験の結果は、直接交換関係におけるルールについての仮説を支持する方向にある。2度目の贈与において贈与される資源 (OUTCOME) は、6条件中3条件で被験者と相手との間に有意な差がなかった。従ってこれらの条件では同等の OUTCOME が交換されていることになり、等 OUTCOME のルールがあったといえる。一方、贈与の際の得点 (INPUT) 及び、資源 (OUTCOME) と得点 (INPUT) の比 (O/I 比) の結果は、全ての条件において被験者と相手間に有意な差が見られた。つまり交換において両者の INPUT, O/I 比が等しくなかったわけで、等 INPUT, EQUITY の2つのルールがあるとはいえなかった。また、等 OUTCOME のルールが選ばれていたことを示す補助的な根拠もある。それは、得点 (INPUT) の量の結果である。効率小、つまり被験者は多くの INPUT をしても相手にあまり OUTCOME を贈れないが相手は少しの INPUT をしただけで多くの OUTCOME を被験者に贈れる、という条件では被験者の方が相手よりも多くの INPUT をしている。効率大、つまり被験者は少しの INPUT をしただけで多くの OUTCOME を相手に贈れるが相手は多くの INPUT をしてもあまり被験者に OUTCOME を贈れない、という条件では相手の方が被験者よりも多くの INPUT をしている。このように一貫して効率の小さい方が多くの INPUT をするということは、互いの OUTCOME を等しくする方向で INPUT が行われている事を示している。つまり、資源 (OUTCOME) の量が等 OUTCOME のルールに従っていない条件においても、交換そのものは等 OUTCOME のルールに従う方向にあったと考えられる。以上の結果より、今回扱った3つのルールの中で直接交換関係において用いられるものは、仮説に示した通り等 OUTCOME のルールであるといえる。

一方、初めの贈与と2度目の贈与を通した総合的な結果は、3つのルールの

どれをも支持しなかった。ただし、総得点（総 INPUT）の量の結果は2度目の贈与での得点（INPUT）の場合と同様に、効率の小さい方が効率の大きい方よりも多くの INPUT をすることを示した。このように総合的な結果からは、2度目の贈与で見られた等 OUTCOME のルールへの支持が得られなかった。しかし、相互作用を交換としてとらえる時には、その相互作用のどこからどこまでをひとまとまりとして考えるかが重要な問題である。Baker（1974）は、ある一連の相互作用のどこまでをひとまとまりとして考えるかによって、その相互作用に対して適用するルールが異なることを示した。同じく Austin（1977）も EQUITY の研究において、どこまでの相互作用をひとまとまりとするかによって EQUITY の判断において考慮する INPUT, OUTCOME が異なることを見いだしている。あるひとまとまりの相互作用がルールに従ったものであっても、その一部を取り出して分析したり、またはその相互作用を別の相互作用と一緒にまとめて分析すると、そのルールに従っていないように見えるのである。総合的な結果が等 OUTCOME のルールを支持しなかった大きな理由はこれである。今回の実験では初めの贈与が異なると、それによって被験者に贈られる資源の量も異なるようになっていたが、2度目の贈与の INPUT の量には初めの贈与の結果による差は見られなかった。このように資源の量が異なっても INPUT の量に差が見られないということは、被験者が初めの贈与と2度目の贈与を別個の交換と考えていたことを示している。総合的な結果は、別個の交換である初めの贈与と2度目の贈与の両者を合計したものであるため、どのルールについても明確な支持を与えられなかったのである。従って、総合的な結果が等 OUTCOME のルールを支持しないことは必ずしも等 OUTCOME が直接交換関係のルールであるという仮説に反するものであるとはいえない。

次に、各ルールに対する評価について検討する。ルールに対する満足さは効率とルールの交互作用がみられた。しかしその大小関係は、操作の際に被験者

に与えられた OUTCOME と相手の人に与えられた OUTCOME の相対的な大小関係に一致していた。従ってルールに対する満足さは効率やルールの種類に関わらず、そのルールによって得られるその人と相手の人の OUTCOME の相対的な大小関係に依存していたと考えられる。ルールに対する公正さの評価では各ルールに差はなかった。これは、2度目の贈与において他のルールよりも等 OUTCOME がルールとして選ばれている結果とは一貫しない。またルールに対する満足さの結果とも一致しない。これは、どのようなルールを受け入れるかと、どのようなルールを望ましいとするかには差があり、ルールとしての正当性があれば少なくとも受け入れられることを示唆している。各ルールによる交換で被験者と相手の人とどちらが損や得をしたかという評価では、効率とルールの交互作用がみられた。しかしこの結果は、操作によって作られた被験者自身の O/I 比に対応していた。損や得という概念そのものが OUTCOME と INPUT の相対的な関係を扱うものであるから、これが O/I 比と対応する事は当然である。しかし、損得の評価において相手の人の O/I 比との相対的な関係が考慮されず被験者自身の O/I 比のみで決定されていることは、被験者が損得に対しては個人的な基準を持っていることを示している。この結果は、交換に対する評価が INPUT と OUTCOME の関係を交換の相手と比較することで決定されるという EQUITY 理論 (Walster, et al., 1978) とは異なり、交換に対する評価の基準が様々であることを示している。つまり、直接交換関係は OUTCOME と INPUT の比だけでは説明しきれないのである。

次に、従来の分配関係の研究において多く見られた EQUITY のルールがなぜ成立せず、等 OUTCOME のルールが成立したのかについて検討したい。まず第一に、EQUITY のルールには INPUT の推定が必要ということがある。EQUITY のルールは INPUT と OUTCOME の関係からルールを規定するため、EQUITY によって交換する時は相手の INPUT を推定する必要がある。相手の INPUT はお互いにわかりにくいものであるから、これを基にした交

換では互いにどういう状態がEQUITYであるかについて合意するのは困難である。それに対し等 OUTCOME のルールでは、比較的外から見てわかりやすい OUTCOME のみを問題とするため、等 OUTCOME かどうかについては合意しやすい。よって、EQUITY よりも等 OUTCOME がルールとされやすいのである。

第二に、直接交換関係では交換関係にある2人の INPUT が互いに相手の OUTCOME と結び付いているため、EQUITY のような複雑なルールを達成するのは困難である、という理由がある。EQUITY では互いの O/I 比が等しい状態を公正であるとしているため、互いの INPUT, OUTCOME を調節して O/I 比を揃えなければならない。分配関係では INPUT がいろいろあっても、その INPUT がどれだけの OUTCOME に結び付くかについては分配者が操作できるので、O/I 比を揃える事は簡単である。これに対して直接交換関係では INPUT が直接に相手の OUTCOME に結び付いているため O/I 比を揃えるのは難しい作業である。特にこの実験のように2人の効率が異なる場合には、O/I 比を揃えるのは非常に困難なので EQUITY を達成することは難しくなる。ただし、効率が違っていても O/I 比を揃える事は不可能ではない。数学的には EQUITY のルールに従うことは可能である。今、2人の人をA, Bとし、2人の OUTCOME, INPUT をそれぞれ O_A, I_A, O_B, I_B とすると、それぞれの O/I 比は、 $O_A/I_A, O_B/I_B$ となる。今、Aさんの効率を a , Bさんの効率を b とすると、直接交換関係では互いの INPUT が相手の OUTCOME と結びつくから

$$O_B = a I_A$$

$$O_A = b I_B$$

(ただし、 $a > 0, b > 0$ とする。)

となる。ここで、両者の関係が EQUITY のルールに従うということは

$$O_A/I_A = O_B/I_B$$

という式がみたされることである。そのためには上記の式から、 I_A と I_B が

$$I_A = \sqrt{\frac{b}{a}} I_B$$

となるように互いの INPUT を調整すればよいのである。しかし、現実の交換関係において、このような計算をすることは不可能である。よって、効率の違いのある直接交換関係では、EQUITY がルールとなりにくいのである。

EQUITY がルールとならない第三の理由は、直接交換関係では交換が公正であることと同時に、その交換関係を維持していくことが重要であるからである。直接交換関係ではルールが選ばれる時、関係の維持に役立つルールが選ばれるのである。分配関係の研究から EQUITY はグループの生産性を高める効果があるが、グループ内の親密さを高めるには等 OUTCOME のルールの方がすぐれていることが明らかにされている。そのため分配関係においても対人関係を考慮する場合には、EQUITY よりも等 OUTCOME のルールの方が選ばれるのである (Stake, 1983)。対人関係を重視する直接交換関係ではもちろん、EQUITY よりも等 OUTCOME のルールが選ばれると考えられる。

第四は、今回の実験では交換関係に対する満足は、O/I 比ではなく OUTCOME の絶対量で決まっていた。直接交換関係においても互いの満足を最大化するルールは最も望ましいルールである。従って、満足を決める要因である OUTCOME の量を中心としたルールの等 OUTCOME のルールが選ばれたといえる。このように、コストと交換関係の仕組みなどの差によって EQUITY のルールが選ばれず、等 OUTCOME のルールが選ばれたのである。

直接交換関係における互いの効率の効果については、仮説は支持されなかった。自己の利益をはかる利己的な人間像を仮定すれば、効率の小さい人は OUTCOME が多くもらえる等 INPUT のルール、効率の大きい人は自分の INPUT が少なくすむ等 OUTCOME のルールを採用すると考えられた。しかし、実験の結果は効率の差による効果を見いださなかった。効率の大小に関わらず等 OUTCOME ルールが選ばれたのである。効率を考慮して互いの

O/I 比を揃えられる EQUITY や, INPUT の負担を等しくする等 INPUT のルールは採用されなかった。しかし, 等 OUTCOME のルールに従うということは同じ量の OUTCOME を生み出すことであるから, 効率に差のある人同士の直接交換関係では効率の小さい人の方が多くの INPUT を必要とすることとなる。その結果, 効率の小さい人に負担がかかることとなる。Blau (1964) は, 資源を多く持つ人とあまり持たない人との交換において, 等 OUTCOME のルールに似た互惠性(reciprocity)がルールとして採用されることが, 両者の間に地位の差を生じさせる原因になるとしている。つまり, 資源をあまり持たない人が交換を維持できなくなり, 物を交換するかわりに資源を持つ人に対して尊敬を表明したり威信を認めることで OUTCOME を与えて, 交換を等価なものとするのである。このように効率の差がルールの選択に効果を持たず, 等 OUTCOME のルールのみが用いられることは, 効率の小さい人が直接交換においては不利な立場におかれることを示している。これは従来, 等 OUTCOME を平等で対人関係の面では望ましいルールであるとしてきた見方とは一貫しない。そこで, 等 OUTCOME というルールについて検討してみる。

等 OUTCOME のルールは, 分配関係では人を平等に扱いグループの親密さを高めるものとされてきた。等 OUTCOME のルールでは分配関係にあった人が全て等しい OUTCOME を受けるからである。しかし, 実はこれは OUTCOME が INPUT と直接に結び付いておらず, INPUT は OUTCOME を分ける際のめやすにしか過ぎない, という分配関係に特有の構造から来ているものである。OUTCOME がどこからか分配者に与えられて, それを分けるだけの分配関係では, INPUT を考慮せずに任意に OUTCOME を分けることが可能である。従って, OUTCOME をいかに分けるかだけが分配関係では問題とされるのである。そこで分けられ方が等しい等 OUTCOME のルールは平等なルールとされてきたのである。それに対して構造が分配関係とは異

なる直接交換関係では、等 OUTCOME は決して相互作用する人にとって平等なルールとはいえない。直接交換関係ではそれぞれの OUTCOME は相手の INPUT と結び付いている。そのため、OUTCOME がいかに交換されるかに連動して INPUT も変化させなければならない。従って、直接交換関係では、OUTCOME がどうなるかという問題と INPUT がどうなるかという問題の2つについて考えなければならない。等 OUTCOME のルールに従うということは OUTCOME を等しくすることであるが、INPUT もそれに対応して変化するのである。もし、直接交換関係にある人の効率が互いに等しければ、OUTCOME を等 OUTCOME にすることは INPUT をも等しくすることになる。この場合は、OUTCOME, INPUT 共に等しくなり問題はない。しかし、直接交換関係にある人の効率が等しいということはむしろ例外である。人には能力、体力、知識などに差のあることの方が普通であり、それが効率の差につながることも多いと考えられる。このように効率に差のある場合に等 OUTCOME のルールに従うとどうなるであろうか。OUTCOME を互いに等しくするためには効率の小さい人は効率の大きい人に比べてより多くの INPUT が必要である。直接交換関係においては、OUTCOME に関する平等は INPUT における不平等な負担を必要としているのである。従って、直接交換関係では等 OUTCOME のルールは決して交換関係にある人に対して平等なものではなく、むしろ負担の不平等を強いるルールであるといえる。従来言われてきた等 OUTCOME のルールへの好意的な評価はあくまで分配関係における結果をもとにしたもので、それ以外の構造をもった関係では等 OUTCOME のルールは必ずしも望ましいものではないのである。

それでは、なぜ今回の実験において等 OUTCOME のルールが被験者によって採用されたのか。先に述べた理由のうち等 OUTCOME のルールが交換関係の維持に役立つという考え方は、効率に差のある場合は成り立たないと考えられる。なぜなら効率の小さい人に負担を強いることが関係の維持に役立つ

つとは考えられないからである。従って、最大の理由は INPUT の推定や複雑な計算を必要としない簡単さ、わかりやすさであると考えられる。交換のルールは、もちろん交換を望ましい形に導くものでなければならないが、その前にまずルールとして交換関係にある人たちの間で理解され、受け入れられなければならない。等 OUTCOME のルールが今回扱った他のルールに対して優っていたのはこの点である。結局、等 OUTCOME のルールはそれが望ましいというより、理解しやすく受け入れられやすかったためにルールとして採用されたと考えられる。

結 論

直接交換関係では、等 OUTCOME のルールが採用されることが多く、等 INPUT, EQUITY のルールは採用されなかった。その理由としてはまず、等 OUTCOME のルールが簡単でわかりやすいことがあげられる。分配関係は INPUT と OUTCOME が直接には結び付いておらず、分配者が OUTCOME を自由に分けることができるという特徴をもっている。EQUITY のルールが分配関係において多く見られたのはこのためである。それに対して INPUT と OUTCOME が密接にむすびついた直接交換関係では、EQUITY のルールを実現するために必要な INPUT の推定や O/I 比を揃えることに非常に手間がかかる。そのために EQUITY のルールは採用されなかったと考えられる。等 INPUT のルールが採用されなかったのも INPUT の推定コストが高かったからであると考えられる。一方、等 OUTCOME のルールは交換関係を維持するのに役立つと考えられる。等 OUTCOME のルールはグループの親密さを高める効果を持つことが分配関係の研究から明らかになっているが、同様に直接交換関係の維持にも役立つと考えられたのでルールとして採用されやすかったと考えられる。

一方、効率の差はルールの選ばれ方に効果がなく、効率の大小に関わらず

等 OUTCOME のルールが選ばれやすかった。このことは等 OUTCOME のルールが一般的であることを示している。しかし、等 OUTCOME のルールは分配関係では平等でグループの親密さを高めるルールであるが、効率に差のある直接交換関係では実際はむしろ、効率の小さい人により多くの INPUT を強いる結果となる。つまり、直接交換関係においては、そのルールそのものに対する好意的な評価にも関わらず、等 OUTCOME のルールは効率の大きい人が得をし効率の小さい人が損をするという弱肉強食のルールである。このようなルールがなぜ受け入れられやすいのかについては、単なるわかりやすさ以上の説明が待たれるところである。このように、分配関係の研究により見いだされてきた交換のルールは、必ずしも直接交換関係においても同じ様に採用されるのではない。これは、直接交換関係と分配関係の構造の違いが大きな原因である。そして等 OUTCOME のルールに見られるように、分配関係と直接交換関係ではルールの持つ意味そのものも異なることがある。この場合同じルールが選ばれても、なぜそのルールが選ばれたかの理由が異なることも考えられる。このように分配関係の結果をそのまま直接交換関係に適用するのではなく直接交換関係そのものを検討して行く研究がさらに必要であると考えられる。

参 考 文 献

- Adams, J.S. (1965). Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 2). New York: Academic Press.
- Austin, W. (1977). Equity theory and social comparison processes. In J.M. Suls & R.L. Miller (Eds.), *Social Comparison processes. Theoretical and empirical perspectives*. New York: Wiley.
- Baker, K. (1974). Experimental analysis of third-party justice behavior. *Journal of personality and social psychology*, 30, 2, 307-316.
- Blau, P.M. (1964). *Exchange and power in social life*. New York: Wiley, (間場寿一, 居安正, 塩原勉訳 1974 交換と権力 新曜社)

- Deutsch, M. (1975). Equity, equality and need: what determines which value will be used as the basis of distributive justice? *Journal of Social Issues*, 31, 137-149.
- Leventhal, G.S. (1976). The distribution of rewards and resources in groups and organizations. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 9). New York: Academic Press.
- Leventhal, G.S. (1980). What should be done with equity theory? New approaches to the study of fairness in social relationships. In K.J. Gergen, M.S. Greenberg, and R.H. Willis (Eds.), *Social exchange*. New York: Plenum Press.
- Reis, H.T. & Gruzen, J. (1976). On mediating equity, equality, and self-interest: The role of self-presentation in social exchange. *Journal of experimental social psychology*, 12, 487-503.
- Sampson, E.E. (1975). On justice as equality. *Journal of Social Issues*, 31, 45-64.
- Shapiro, E.G. (1975). Effect of expectations of future interaction on reward allocations in dyads: Equity or equality. *Journal of personality and social psychology*, 31, 5, 873-880.
- Stake, J.E. (1983). Factors in reward distribution: Allocator motive, gender, and protestant ethic endorsement. *Journal of personality and social psychology*, 44, 2, 410-418.
- Walster, E., Walster, G.W. & Berscheid, E. (1978). *Equity: Theory and research*. Boston: Allyn & Bacon.

Justice Norm in Direct Exchange Relationships

Wataru Ide

Direct exchange relationships, in which one's input turns into the other person's outcome, are distinguished from allocation relationships, in which one's input relates to his own outcome. The present research investigated the way in which persons exchange resources in direct exchange relationships and the effects of the efficiency of transformation on direct exchanges. The efficiency of transformation is the ratio of the other person's outcome to one's input. Subjects exchanged their resources with an alleged partner in an adjacent room to increase their outcome. Results showed that they exchanged resources according to the equal outcome rule by exchanging equal amount of outcome. However the difference of their efficiency of transformation had no effects to the exchanges. The fairness of equal outcome rule in direct exchange relationships was discussed.